

356

特 67

321

加藤定興編輯

佛法
耶蘇
穴
き
が
く

明治十四年十月發兌

014718-000-4

特67-321

穴さがし

加藤 定興 / 著

M14

ABC-0004



耶佛法の穴さびし

○

かのれの赤きを赤しとせずして人の赤きを赤しとするも
 の此を猿の尻わらひといひ人に五分の非あれのおのれに
 五分の曲れる所あり互におのれを隠して人を顯わし兎や
 角と争論をなすもの此を水懸論といふ人たるもの、耻か
 つ慎むべき所なり借々近來の有様を見に食るやら食ぬや
 ら半死半生の境に陶壺の繩渡をなす辛き此世のなりはる
 の我人ともに苦む所なり夫れ斯の如く覺束なき天地の内
 に生れながら平氣然として一大無益の争論を社會の上
 開き大に愚民の心を惑亂するの水懸論をなすものあり其

人たれずと尋ぬるに一の釋伽教に沉溺して目のみへぬ信者なり又其一の耶蘇教を妄信じて腰の緩けたるものとなり此二者たがひに虚誕空論の方便を構へ西方に居ます彌陀ころ人の頼むべき佛にして天に眞の神とていなきものなりと言へん天の眞の神ころ我々が今世來世の幸福を恵み給へる神ぞかし有もせぬ隨佛を念するとの愚かさよと互に空をもつて虚を討つろの有様のおかしき余所にみる目も馬鹿らしく實に正氣の沙汰とはおもわれざる次第なり夫もよし此も商賈がたきといへは互に飯の食ひわけともなるとなれば精々ともに力を盡して蹴合をなすもかなりなれども此争に付て少し譯の分らぬ一事あり其身の

釋伽坊主にてもあらず又耶蘇坊主でもなき人たちが霧暗矢鱈に宗家の門に肩を入てたのまれもせぬ力持をなすものありさて此人たちの皆いすれも中等以上の人物にして多少の才識を有し將に大に爲すあらんとするの壯者か痛痒相關せざる宗論の範圍に喙を容れて兎や角と世話を焼く定めし耶蘇坊主より養なれ居る人物か又日本一の寐惚法師よりたのまれし事のあるか孰れにしても一文にもならぬとに左まで力の盡さるべし彼といひ此といひ眞實もつて心中から歸依信仰の念を生して斯まてにするとなりとせぬ以來の愚人の部へ編入せねば至當を得ざる事なり此大切かぎりなき日月を坊主どもの爲に費やと

の無益中の一大無益なり到底顔れか、つたる釋伽堂の内
にあつて兀々然と晝寐をやらかす様な無氣力坊主の眠り
を醒させてみた所が何の益もあるとならず顔れるもの
顔れ次第眠るもの眠り次第たどへ押しうたれて死ねば
とて過去の困なり現世の果なり別に不思議なとも氣の毒
なるともなし耶蘇坊主の加勢をなすものとてもよく考へ
てみよ彼等が本國の人民等の益々姦智を極めて人類社會の
間に立ち巧みに詐術を磨き出して人を苦まひるもの、多
はさの歐米兩州の人より甚だしきなし夫れ斯の如く罪
を犯すもの、多を父母の國を去りはるく海を隔て、知
らぬ他國に來りてさも西洋諸國の人民の皆善良にして路

に落たる物をも拾ふもの、なき様に説き立つれども其實
決して然らず西洋人は世に詐り多きくして恐ろしきも
のいなし坊主の所謂る外面の菩薩の如く内心の夜叉の如
しと實に彼等の如き者をいふなるべし夫れかのれが本國
人の姦惡邪私の置て顧みずして言葉も通ぬ他國に徘徊
し愚人が耳を驚ろかし巧みに理屈を構へて己れが田へ水
を引入んとするの最も怪かしきと、いふへきなり然るに
日本の無智人民の彼等か巧言に欺むかれてアメン社會
の人となるもの多し察するに耶蘇教を妄信するの人たち
の大半青年書生に多し此人らの始め耶蘇教下に入るや決
して眞心もつて其宗意をよるこぶものにあらずして其實

の洋籍を讀み洋客と言語を通ずるの自由を得て外務省の
小使か税關の小吏にでもなりたく志を立つれども學資に
乏しく預舎に入るとの容易に出来ぬゆへ先づ耶蘇教を假
に信ずるとして其門に入る時の飯もくひしてくれし書
物も教へてくれると己れが望の十分に達するとをよろこ
び遂に枉げて其教下の鞞袈裟に入るもの皆是ならざるに
なし斯して年月をふるほどにしらすく彼が意のままに
説立られ今の十字架邊の泥中に陥りろの正鵠を見うしな
ふて本來の耶蘇坊主となるもの多し嗚呼また惘然至極の
者といへども抑々卑屈千萬の至りならずや誠にかくの如
く飯のくへない無智無力の書生等が如何ほど利口らしく

理窟をならべ立やうがさのみ恐るゝにたらざれども今日
の如く雙方とも赤目になつて役にも立ぬ世迷言をやかま
しく争ひ合ふと益々我國の愚人もが大迷に迷ひ騷ひで
愈々愚人に愚人のうぬりをやらかすによつて以後の左
様な馬鹿げたとに力を盡さず我身にふりかゝる大難をな
にとかして救ひ合ふの策を建つる方が余程利口らしく實
地幾分かの利益をも社會の上にあらわすとの出来るもの
なり此故に吾輩の佛法と耶蘇の争論に付入ぬ事に無益の
骨折を爲して兎や角と豚を容るゝ此を彌治馬論者といひ
て東京人の最もいやしむる所なり全体日本固有の坊主と
もが嫉心にて耶蘇の横行を防遏せんとするゝ人情にかゝる

て己^{おの}己^{おの}を得ざる義^ぎなり又耶蘇坊主^{やそぼうしゅ}か天^{てん}の眞^{まこと}の神^{かみさま}様^{さま}だのど
言^{こと}を極^{きま}めて日本^{にほん}の腰^{こし}ぬけ書^よ生^{せい}を取^と込^こむの畢^{ひつ}竟^{きやう}彼^{かれ}が權^{けん}謀^{ぼう}上^{じやう}
にかゝて逃^{のが}れがたき事^{こと}ならんと存^{ぞん}ずれ^れの倒^{たふ}底^{てい}坊^{ぼう}主^{しゅ}同^{どう}士^しに
喧^{けん}嘩^かさせて誰^{たれ}一人^{ひとり}も聞^きものなく捨^す置^おく時^{とき}の雙^{さう}方^{ほう}どもに
見^み物^{ぶつ}人^{にん}のな^なき土^ど依^いの上^{じやう}に角^{かく}力^{りき}をな^なすの愚^ぐなるとを察^{さつ}し人^{にん}間^{げん}
本^{ほん}來^{らい}の面^{めん}目^{もく}に歸^{かへ}り申^{まを}べ^べき^きの必^{ひつ}定^{てい}なり左^{ひだり}すれば是^{これ}まで糞^{くそ}を
製^{せい}造^{ぞう}する機^き械^{かい}と呼^よべし寐^ね惚^ぼ法^{ぽう}師^しの夢^{ゆめ}もさめ腰^{こし}拔^ぬけ書^よ生^{せい}の
耶^や蘇^そ妄^{わう}信^{しん}者^{しや}も一^{いつ}人^{にん}前^{まへ}の男^{おとこ}となり何^{なに}なり漢^{かん}なり其^{その}日^ひを働^{はたら}ら
きて其^{その}日^ひをくらす正^{ただ}しき人^{にん}間^{げん}となり遊^{あそ}民^{びん}の稱^{しょう}號^{ごう}の忽^{たち}地^ぢに
消^{しょう}滅^{めつ}しかつ虚^ま語^ごを構^{かま}へ愚^ぐ夫^{ふう}愚^ぐ婦^ふを斯^あく^くの罪^{つみ}をも作^{つく}らず濟^{せい}
み行く消^{しょう}き流^{りゅう}れの世^よ渡^{わた}りも出^で來^きるなり畢^{ひつ}竟^{きやう}の争^{あらそい}ふものよ

り^りの其^{その}争^{あらそい}を聞^きく人^{にん}の方^{かた}が余^よ程^{ほど}の愚^ぐ人^{にん}といふべし况^{いは}んや其^{その}
争^{あらそい}に資^い金^{きん}を出^だして雙^{さう}方^{ほう}どもの屁^しか^かしをな^なす者^{もの}に於^おてをや
實^{じつ}に世^よに愚^ぐ人^{にん}はどあ^あれなるもの^{もの}の^のあらし又^{また}ろの愚^ぐ民^{びん}を
たぶらかして快^こよしとするもの^{もの}はど世^よにくましき^きのな
し斯^かく言^{こと}へば世^よの愚^ぐ人^{にん}ども^{ども}の定^{さだ}めし吾^{われ}輩^{はい}を指^さして邪^{よこ}見^{けん}の
者^{もの}と言^{こと}ふならんか^かのしらねども吾^{われ}輩^{はい}の生^{せい}來^{らい}釋^{しやく}伽^がも嫌^{きら}ひ耶^や
蘇^そも好^{この}ま^ます去^きな^なが^がら其^{その}味^{あじ}を嘗^あず^ずして此^{こゝ}を評^{へう}するもの^{もの}なら
ず嘗^あず^ずて佛^{ぶつ}書^{しょ}やテス^{てす}メ^めン^んト^との^のあ^あら^あま^まし^しの讀^よみ得^えたる^たる^るとも
あれども頓^{とん}と感^{かん}心^{しん}するは^はどの御^ご名^な論^{ろん}もなし倒^{たふ}底^{てい}の野^や蠻^{ばん}時^じ
代^{だい}の愚^ぐ民^{びん}を籠^{かご}絡^{らく}するの具^ぐに過^あすして今日^{けふ}の如^{ごと}き活^{かつ}潑^{さつ}なる
政^{せい}事^じ世^せ界^{かい}の^の人^{にん}心^{しん}を籠^{かご}絡^{らく}するに足^たらざるなりされば吾^{われ}輩^{はい}の

天よりも地よりも受ずして自然と自己が是まで勃蕩たる
世海の風潮に吹き洒され幾多の艱難上より磨き出したる
固有の精神をのみ信するが故に野蠻時代の聖人等が寢言
なとに頼んと歸伏する氣の少しも無御座候と斯く書下
し來る以上死して後決して西方へも行かず天へも昇ら
ず只此世かぎりにて皆様に御暇を頂戴るたす積なれば釋
伽も耶蘇も猫も杓子にも思も義理もなければ雙方の穴を
數へ出して遠慮會釋もなく糞精同様にた、さくたきて粉
な微塵となし釋伽心醉の亡者やら耶蘇妄信の馬鹿どもに
一服のませせて本性の人間に立ち歸らしめんと欲し雙方の
穴を探し出して宗教の信するに足ざる譯を説き立んと欲

し先づ釋迦坊主よりろくど始むべし

○釋伽の穴

釋伽の尊ぶ所の佛陀即ちホトケ此を和解すれば即ち大覺
と申して大にささると云ふとなり成て世の中の有象無
象に拘はらば皆打ち捨てしまへと云ふ一種道樂の主義に
して之を解脱涅槃に入るといふ而して其涅槃に入し佛に
の如何なる樂のあるものなるやと問ふに樂も苦も何にも
なきものとなるよし涅槃經に之を得に利なきを以ての
故に涅槃を得ると云へ涅槃に入れば色も香も苦も樂も

なきものとなるなり総ておのれに得んとする所あるが故に迷を生ずるに至ると是釋伽教大乘の大覺にして眞の法性を明にせば佛もなく世界もなきものなり然るに世の賣僧の西方に彌陀如來かゝりしめて一切の衆生を濟度せんと誓ひ給ひしなりナントも同行方信心功力によつて安樂淨土に往生するを願ねば一寸先の暗の夜のしれぬ道に不迷ひゆくなりとさも誠しやかに嘘八百の方便を以て無智無能の惡人が心に迷の種を蒔き飯を食ふ田とする根來釋伽の教に戻りたる佛道の惡魔なり釋伽の迷を最も戒め本來空の寂滅無爲を尊ひ極樂淨土とやら云ふ結構な所へ往生させてやるだのと云ふ様な執着の念を人にあた

へる積りの少しもなしされば稱名念佛なごの迷ひの尤も甚だしきとを人に勸むるの之を妖僧とや云ん天下幾萬の僧侶が今日安穩に飯を食ふて平氣に起臥を爲すの皆この虚誕より出すこれ一の大なる穴にして逆も布其那の辨ある姦僧と雖も到底言ひ填めるとの出來ぬ所なりさて釋伽が云ふ如く無明より起る萬法萬事人生の苦惱を忘れて無垢清淨の人となり痛痒相忘て不生不滅の人となれよと勸むれども如何に悟を開て見ても北風の寒く腹が空くなれば目が暗む故に己むとを得ず今日の勞働によつて明日の生活を保たんとを願ひて朝の疾く起き夜の遅く寝て種々様々のとに身思を勞費するの人生の常なり何を

苦しんで諸の雜業うち捨て彼の寂滅とやらいふ譯も分らぬ所に其身を棄るとい倒底人情として是の如き空々たる涅槃に入るとを願はざるなり是故に釋伽教の取も直さず早く死んで此世の事を忘れてしまへと云ふ奇怪千萬の教なり是の息の通ふて居る人への無用の教にて此を敬法とい申しがたし是釋伽が法門を立つる土臺の穴なり天地の萬法萬事の決して無明より生ずるものへのあらずして人生自然の眞力より起るものなり迷ひどの自然の眞力に乏しき所を發して遂に暗々たる魔境に滔るものなり人生自然の眞力との物を差別するの智力を云ふ此智力よりして総ての大覺を明にするを得に至る然るに之を迷

ひだの戲妄だのと云ふ時の無能無識の愚人に歸依して其人を尊へずんばあるべからざるなり釋伽自身が種々様々のとに理議を設けて人の迷を解かんとして自ら其迷に陥るとをしらざるものなり我か身に悟れたと云ふとが知れたときにマダ々々悟れてぬ証據なれば釋伽とても迷の中に苦惱せしものなりされば事々物々の理議を明らかにする自然の眞力より生し來るものにして決して迷とい言がたし然れども其理議の分らぬ中の即ち迷ひなり迷ひの萬事萬物より生るものにして迷ひより萬事萬物の生ずるものへのあらざるなり釋伽の其理を先後に考へて自然の眞理といふとを知らざりし那落よりも深き穴といふべ

し
若し釋伽の云ふ如く寂滅無爲清淨本然の体に歸するを
尊び世上の迷を打ち捨てて迷ひを生ずる時の萬事萬物の
五月蠅きめにあねばならぬとなり故に我身の生て居る
だの死んで行くだのといふとに目を付るゝもく迷ひ
の大なるものにして是より萬事萬物の利益得失だの榮枯
盛衰だのと云ふなさけなく穢らひしき心を生じて我身を
憂苦の入物となすとなかれと悉しく其理義を明らかめられ
たるの即ち大覺にして佛道の根源なり此根源を尊ぶ僧
侶は世に迷ひ多く疑ひ深きものあらじ既に近世西洋
より耶蘇教てふ一派の宗教が舶載し來りしより僧侶の大

に氣を揉み出して其飯の食ひわけとならんことを第一番の
愛となして酸だの茹蕒だのと精進くさき口から耶蘇を駁
撃するとを始め彼をみると恰かも毒蛇猛獸の如く種々に
手をかへ品をかへて自分の領分とする信者の心を奪われ
さるとに力を盡して居るに即ち修羅界の有様あり本來空
の上位に其心を安んじ解脱涅槃を得んとするの教を根源
とする佛者が所業どの思ひれざるなり畢竟人間一息尙存
の間倒底免れがたきの自愛の心なり既に此心の免れ難
きを知らば人間外の教の様な釋伽教を出て眞の無佛無
世界と云ふ我々が實理の門に入り來れさせれば眞法性を
見るとを得るに至らん何を哀みて斯まで耶蘇を敵視する

や畢竟飯の食ひわけを憂ひしより起るに相違なし尊佛豈に食の爲めのみならんや是今日の坊主どもが心得違ひより自から其大なる穴を世上に現したるものなり

佛者の穴を探し出せば其數實に三十三間堂の佛の數よりも多ければ次編に悉しく記すべし

○耶蘇の穴

耶蘇教を妄信するもの、耶蘇より外に天の眞の道なきものなりと云ひて彼の佛法を愚夫愚婦が阿彌陀如來に三拜九拜して有もせぬ極樂行を願ふて其日の閑暇を稱名念佛に暮す様なる宗旨と云泥月籠の相違あるものにして我が信仰するの宗旨、天の眞の神が其子を此世に降し賜

ひて人間に限りなき幸福を二世の中に與へんと誓ひせ給し天地公道の宗教なり是故に此世に益もなき愚夫愚婦が目的もなきとに信を起すとの事かわりて此耶蘇を信するもの、大半青年秀才の人より學者紳士の社會に多しと喋々佛法の事を駁撃すれども能く其内實を考へ見るに余が総論に述し如く飯の食へない腰ぬけ書生が自己の小策によりて假に信仰の面付を爲す者のみ學者紳士が耶蘇を信仰すると云ふ、其人索より天稟の愚昧にして世道の眞理を看破するの出來なひ俗に結構人と稱する毒にも薬にもならぬ社會の無用物が多く之を信するものにして少しく才識ある學者紳士に至つては毫も宗教に念なきもの

なり然れども野心ある士人の時として己れが名望を繋ぐ
爲めに表に宗教を信するの假粧をなすものありこれ二つ
なから眞成の信者にならざるべし然るに耶蘇を賣るも
のども此二つの者も証據となして佛教信者の愚夫愚婦
を笑ふの所謂猿の尻わらひにて取に足らざる馬鹿者の
説なり而して佛教眞意の何者たるをしらず只賣僧が釋伽
を賣りてお賽銭を貧ぼるものどもの話を聞いて猥りに之を
非とするの見識なきもの、言にして宗教を信する者の心
得方どの申されざる次第なり此耶蘇信者が大なる穴とい
ふべし

釋伽の虚無の素より笑ふべきものなれども耶蘇が神の子

とか天の眞の道だとかいへども固より當にならぬ虚構な
れば我々の斯の如き宗教の脱然社會の人心より追出して
眞成の理論を新たに同胞兄弟の腦中へ吹き込めんと勸む
れども天下の廣く愚人の多くなかゝ急の仕事に行か
ねど逐次に浸潤させて其面目を改寫せん日夜苦慮するの
餘り此に二教の信すべからざる原因の一分部を漏し記し
て矇昧社會の愚人に讀ましめ孤獨の病源を愈さんとする
も人心の害を除き世道に益を出すの一助ともなるべし
と余輩の深く之を信するにより此後編を續ひて二教を論
破する所あらんと欲す

明治十四年十月四日出版御届
同 年同月 日出版

(定價金六錢)

京都府士族

著者兼 出版人 加藤定興

下京區第廿組宮川筋五丁目三百三十番地

印刷寺町太田活版所